
Wonderful song

中浦雄介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Wonderful song

【Nコード】

N2452B

【作者名】

中浦雄介

【あらすじ】

4人組新人バンド『レイジーアント』。才能も技術もあるのに、彼らは頭のネジをどこかに無くしてしまった。ぶっ壊れた心と、非日常的な生活。そして、彼らを取り巻く、『ちよっと』変な人達の物語。

PART 1

名前 柿崎光

年齢 21

性別 男

備考 最近、注目視されている新人バンド『lazy ant』の、ボーカル、ギター。

——PART 1

『ダークライト』

まあ……あんまり話したくもないんだけどね。
知らないほうが良かった、って思うよ？
人間のクズの集まりだからね。

『lazy ant』ってのは。

柿崎光。

ボーカルで、あとギターを弾いてる奴ね。

紅一点ならぬ、白一点。

バンドの四人の中では唯一の男さ。

歌は上手いよ。上手いって表現が陳腐になるくらい。

死に絶えたような絶望さとか、一人ぼっちの淋しさとか、色々な負の感情が混ざり合ったような……そんな印象を受けたね。

才能なら他のバンドの奴らが霞んでしまっくらい持ってたんじゃないか？

作曲もしてる。半分ぐらいはあいつが作った曲だったと思う。

作詞に関しては、全部、あいつが書いてるらしいよ？

『柿崎光の歌詞は、情緒があって、儚くも繊細で、一つのアイデンティティを作り出している』

なんて、どっかの雑誌に載ってたけどね。

……まあ確かに理想論とか、青臭い言葉とか、恋愛観の押し売りとか、そんなのは一切、感じさせなかった。

言葉を絞りだして、うまくメロディーに乗つけることに長けてた気がするよ。

だからと言って……、あの柿崎光には勿体無い才能かもしれないけどね。

あいつは……バンドの中で一番頭がおかしいのかもしれない。
何かに捕われ過ぎてるんだろうね。脳が真っ青なんだよ。

まず、人と話すときは、声が確実に吃ってくる。

「ぼ、ぼ、僕は……」

みたいな感じで。

常に何かに対して恐がつてる。誰かがあいつに話し掛ける度に、
身体がビクッと引き攣ってたね。多分、世界中の全ての物質を敵
だと思ってるんじゃないかな？

嫌悪の対象っていうか……だから過敏に反応して、意味なく身構
えたりするんだろうね。

質が悪いのは、一番嫌いなものが『自分』だってとこだよ。

必要以上に卑屈で、必要以上に心が病んでいる。

思い込みが激しいんだよ。

自分はこの世に必要な人間じゃない、ってね。

だから、何に対しても逆らったり、自分の意見を伝えようとしな
いんだ。

究極の受け身。多分、死ぬときも、心を見せないだろうよ。

もう一人、ギターに波崎美雪っているだろ？

柿崎光はそいつの玩具なんだよ。

殴られて、蹴られて、踏み付けられて、抓られて、詰られて、犯
されて。

ライブハウスのステージで、鼻血を出しながら歌ってたこともあ
ったよ？

それでもあいつは、嫌だ、の一言も言わないんだ。

自分に口があることすら、おこがましいと思ってるんじゃないか？

でも、色んなことに敏感になり過ぎて、ストレスが精神を歪ましてしまった。

代償……っていうか、病気と言ってもいいくらいにボロボロになったんだよ。

ビタミン剤とか飲んでたけど、あんまり効き目が無かったみたいだったし。

不健康で、いつも目の下にはクマが出来てたね。

さて、柿崎光はそんな自分の精神を保つために、どうすると思う？
常に緊張して、常に身構えて、常に防御壁を作ってさ。あいつは今までどうやって生きていけたと思う？

あいつの右手をみてみるよ。

裏手首から、指の根本部分まで切り傷がいっぱいあるだろ？

あいつ……柿崎光は自分の手の甲を切ってるんだよ。

その傷口から滲む血を舐めて精神を落ち着かせてるんだってな。全く、気持ち悪いったらありやしない。

リストカットじゃないんだけどね。『手の甲』をナイフかなんかで切るらしいよ。

多分、手首に切り傷があつたら友達か何かに虐められる、と思っただからじゃないか？

高校生の頃からしてたしね。だからあの時はいつも右手に包帯をぐるぐる巻いてたよ。

「て、手に、や、火傷の、あと、跡があるんです」
そういう嘘を言ってたけどね。

ライブでは本番前に切って落ち着いてるらしいけど、もしかしたら『人』って文字に切って舐めてるかもしれない。

まあ、可哀相な奴だよ、本当にね。

何でそんなに卑屈になったかつて？

さあ？そこまではあたしにも分からないよ。

あいつの家族なら知ってるんじゃない？あいつには妹がいるから

……。

柿崎菜摘……だったか、そんな名前だよ、確か。

ああ、これはあたしの孫が言ってたんだけどね。柿崎光は異常な程のシスコンらしいよ。

あいつ自身が嫌悪のかたまりみたいな奴だったから、信用してる人間なんていなかったからね。妹が唯一だったんじゃないか？

まあ、そこんこは妹に聞けばいいだろうさ。

大丈夫、妹はまともだよ。

柿崎光に比べたら、全然話しやすい部類に入るんじゃないか。

柿崎光つてのは何で、ああなっちまったんだろっね。

……恐怖感か？

信用とか、安心とか……、あいつはそういう言葉が全然似合ってなかった。

いつも怯えて、いつも殻に閉じこもって。

自分も嫌って、自分に関わる全てを嫌って。

歌うことと、妹にだけ、無意識に懐いている。

それ以外は……恐怖感ってことなんじゃないか。

あいつは恐がってた。

あたしのことも、目の前のあんたのことも。

その理由がホントに分かんないんだよ。

暴行？

貧困？

冷遇？

虐待？

拷問？

強姦？．．．e t c？

……まあ、どうでもいいことかもしれないけど。

でもね、あいつが書く詞で救われる人が居たりするのは事実さ。
歌ってる姿は『普通』の人だからね。見ていて安心するし、心が
動かされる。

本質さえ知らなければ、それでも無理に押し通せるのさ。
誰だつて糞みたいな部分があるんだよ。ただ、柿崎光はその部分
が目立っているだけ。

迷惑も、実害も、犯罪すら、あいつはしていない。

エコロジー、風紀、社会貢献度も、柿崎光は障害として関わって
きてないよ。

精神が病んでるだけ。

可哀相なだけ。

そして、あまり人に好かれないだけ。

取り柄つてのは『歌』しかないだろうし、余命も少ないだろうな。
生きてる証を残そうともしないし、歌いたい、つてだけで命を保
たせている。

嫌悪を言葉にしないで、無意識に書いた詩をなぞつて、人の心に
踏み込もうともしない。

もし、全人類がああいう性格なら、戦争なんて起きないかもしれ
ないね。

それを『完璧な人間』って学者はいうのかもしれないね。

でも、あたしは……やっぱりあいつのことは好きじゃないよ。

だって鬱陶しいから。

《語り部》

——水城越子（68）

l a z y a n t が昔、よく練習していた田村スタジオの経営者。

『ダークライト』

E N D

PART 2

名前 波崎美雪

年齢 21

性別 女

備考 最近、注目視されている新人バンド『lazy ant』の、ギター担当。

——PART 2

『ライナスミュージック』

いやー、昨日のライブは凄かった！見習う部分が沢山ありましたよー。

さすが『lazy ant』。僕ももっとしっかりしないとね……

特に美雪さんには驚かされましたね。

いやね？僕もギタリスト志望だから、美雪さんはやっぱり憧れる部分があるわけですよ。

特に、間奏の横殴りみたいな演奏には電気ショックですよ！

美雪さんのギターリフは、プロと肩を並べるぐらい高い技術を持つてるんじゃないかなー。

光さんですが……美雪さんも作曲しますよ。

光さんはバラードっぽいのが上手くて、美雪さんはエモコアって感じで、疾走感がある『ハードロック』って感じですかね。

どっちも良いんですが、美雪さんのギターを十分に活かしているのは、やっぱり美雪さんの曲じゃないですかね。

とにかく！『lazy ant』で美雪さんは、メロディの根元を作ってる凄い人なんですよ！

性格は……んーどうなんですかね。

ああ、いや、こう言っちゃアレなんですけど……、美雪さんはなんか裏表があるような気がするんですよ。

普段は笑顔も素敵で、人当たりの良い気さくな人なんですけど、なんか少し違和感があって……。

事あるごとに馬鹿にされてる気がするんですよ。僕だけじゃなくて、友達の英治もそう言ってたし。

嫌われてるわけじゃないと思うんですが、どうも打ち解けてない感じがするんですよ。

これは、長く美雪さんと一緒に居たから分かるのかもしれないですね。英治もそうだったし。

あ、でも、他のメンバーの方々にはそうでもないかな。素直に接していると思います。

メンバー3人以外ですね、蔑んだり、馬鹿にしたりする雰囲気があるの。

……美雪さんは、光さんのことをどう思ってるのかな？

光さん、美雪さんにはかなり虐められてるっていうか、いや、愛されてるっていう表現もいいかもしれないです。

奴隷じゃなくて、手下でもなくて、美雪さんにとって光さんは、『玩具』なんですよ。

この間、スタジオでの休憩時間に美雪さんが急に、光さんを連れてどっか行っちゃったんですよ。

僕と英治はちよつと気になったんで、着いていったんですよ。したらそこは個室のトイレで……。

いやー怖かったです。

なんか、バキバキ殴っている音や、壁にゴンッ！って何かがぶつかってる音が聞こえて……。

さすがに、僕も英治も止めたほうがいいかな、って思ってドアを開けようとしたら、急に音が止まったんですよ。

何かな？って思ってたなら、今度は布が擦る音と、あの……、何か変な音が。

ビビりました。僕と英治は何かいたたまれなくなつて、その場から去ってしまったんです……。

光さんには悪いことしたなあ。

1時間後に2人は帰ってきたんですが、美雪さんはニコニコと、表情を変えてなくて、光さんはぶるぶる震えてました。

光さんの目に痣が出来て……。

でも……、他のメンバー2人は美雪さんと光さんを見て何も言わなかったんですよ。興味無しっていうか……。

「いつものことだから」

って2人は言っていましたけど、『lazy ant』についてのいつもって、僕らから見たら変なんですけどね。

あ、これは、柏木さんっていう僕と英治の先輩から聞いた話なんですけど……。

光さんって意見とかを全く言わない人じゃないですか。いつも何かにビビってるし……。誰にも逆らわないんですよ。

だから、美雪さんは光さんの家に夜這いに行ってるらしいんですよ。何故か合い鍵は美雪さんが持ってますし、勝手に入っては暴行したりして。

美雪さんは俺らには裏表が激しい、得体の知れない人ですが、光さんにとっては万年発情期なんですね。

美雪さんの弱点？

そうですねー、……。ああ、1つだけありますよ。

美雪さんはいつも首に銀色のネックレスを着けてるんですが、それがないと、ダメらしいんですよ。

『ハリネズミ』っていう小説があったでしょ？ブランケット症候群でしたっけ……。

依存症みたいなもので、特定の『何か』を肌身離さず持つて無いと、精神不安定になる『精神病』らしいんですが。

1度、そのネックレスが何かの拍子で外れて、自動販売機の下に潜り込んで取れなくなっただんですよ。

その瞬間、美雪さんは顔面蒼白で、血の気がドン引きした感じがしました。

身体中に鳥肌が出来て、ずっとぶるぶる震えてましたから。その時の季節が夏だったんですが、まるで南極に裸で落とされたみたいにビクビクしてましたね。歯もガチガチと音を起てて。

掃除のおばちゃんに取ってもらって、何とか事無きを得たんですが、あの時の美雪さんは忘れられないな。

美雪さんはいつも何かに縋ってなきゃダメなんですよね。

僕は……あの4人の中で美雪さんが1番弱い人間だと思うんですよ。

建前を作って。

本音を隠して。

殴ったり、犯したり。

銀のネックレスで自分を守ったりして。

「み、美雪は、し、しゃ、シャボン玉よ、よ、り、わ、割れやすい心を、もっ、持ってて、それを、シエ、……も、木製のシエルターで、か、隠しているんだよ」

って光さんは話してましたね。

美雪さんは、多分、いろいろと凄まじい経験をして来たんでしょ
うね。

僕なんか、やっぱり『普通』の人間ですよ。

それが、美雪さんのメロディを作り出しているんですね。『I a
zy ant』ってそういう人達の集まりなんですな。

でも、正直思いますよ。

美雪さんはどんな本音を隠してるんだろうってね。

ネックレスが外れた時、あんなに震えるくらい人に見られたくない心。

見てみたいなあ。

《語り部》

——大谷繁孝（19）

『lazy ant』のサポート。ギター担当。

『ライナスミュージック』

END

『ダークライト』：1（前書き）

これから本文です。『PART1』、『PART2』を見なくても分かるけど……、見てくれたら嬉しいですよ。

『ダークライト』：1

透明のアクリルに、木製か、プラスチック製か、よくわからない縁が付いたドアがある。

開けると、満席なわけでもなく、空いてるわけでもないくらいの客が、コーヒーを飲んだり、オムレツとかカレーを食べたりしてる。喉も渴いてないのに、食堂やカフェに行くと、無駄に高い飲み物を頼んでしまうのは何故だろうか。

とにかく、用があるのは、入口からギリギリ見えるくらいの、奥の席に座っている男である。

「やあ。結構、時間掛かったな」

「まあ……。ちよつと色々あつてね」

言葉を濁して、紀藤慶一はバツの悪そうな顔をした。

大学の食堂にカフェの雰囲気混ぜるってアイデアはよかったと思う。

ただ、所々に不備や改善点が目立ってしまった。

ちよつと旨くなくても、安くて量が多けりゃ、学外にある、おばちゃん気さくな安いラーメン屋にわざわざ行かなくてもいいのだ。でも、待ち人——柏木慎吾は、この食堂カフェが気に入らしない。

だが、慶一はラーメン屋派なので、この食堂にあんまり来たことはない。

「で、なんで遅れたの？」

「いや、凜が……」

更にバツが深くなって、頭を掻いてごまかす。目を落とすと、また、プラスチック製か木製か分からない、白いテーブルが視界にあ

った。

慎吾はコーヒーを飲んでいた。

コーヒーみたいな洒落た飲み物は、慎吾に似合っていないのに、しかもブラックを飲んでいた。

「凜ちゃんがどうしたの？」

とても興味深そうに、ニヤニヤ笑っている。

「ああ……、いや、そうじゃなくて。今日はお前が呼んだんだろ？何だよ、話って」

「いや、それはすぐ済むからいいんだよ」

慎吾は指でテーブルに『の』の字でなぞっていて、慶一はとつくに座っていた。

それならわざわざ呼ぶなよ、と慶一は小さな悪態をつく。それすら楽しんでるのか、慎吾はずっと笑顔のままだ。

「で、凜ちゃんがどうしたよ」

「……いや、何か、凜の兄貴に会うことになって」

軽く咳込んで、慶一もやつぱりコーヒーが飲みたくなった。

でも、バイトをやってないから、やめとこうって感じで溜息を吐いて終わり。

いつも慎吾のペースで、呼ばれた慶一が話題を吹っかけるのが二人のスタンスになっている。

どうしようもなく、慎吾の性格によって、慶一のイニシアチブがへし折れている。

「兄貴？」 だから、慎吾はいつも嬉しそうなのだ。

「そう、兄貴。なんか、俺らのことをよく思っていないらしい」

慶一は慎吾が飲んでいたコーヒーを口にしたら。しかし、慎吾は苦い顔をすればいいのに、軽く鼻を鳴らすだけだった。

「妹想いの兄さんだな。まあ……分からんでもないけどな」

慎吾は慶一が飲み干したコーヒーのカップをちらっと見る。黒い一滴が、丸みにじわじわと滑っていく。

「でも、別に良いんじゃないか？兄貴ぐらい、どうってことないだ

る」

「それがそういうわけにもいかないんだよ」

慶一は辟易する。

「その兄貴がヤクザらしいんだ。しかも中の上ぐらいのレベル」

「うわ……、それはきついな」

慎吾はさすがに、その笑顔を軽く苦ました。

「漫画じゃ三流、ドラマじゃ視聴率一桁、現実なら最悪以外、何物でもないな」

「しかも漫画なら買わなきゃいいし、ドラマなら見なけりゃいいんだけどな」

慎吾の例えに、溜息と自嘲で返す。

「最悪だな」

「最悪だよ」

慎吾も、少し声のトーンが落ちてる気がする。

なんか、明らかに憐れんでる視線はム力ついたが、……まあ分かんなくもないから、何も言わないままにしておいた。

「で？凜ちゃんは何て言ってるの？」

「そんなに焦ってもなかった。『認めてもらえばいいじゃん』だってさ」

「まあ……そうなんだろうがな」

慎吾は苦笑に、少し肩を揺らした。「で？お前はどうしたいの？」

「どう……って」

「結婚するの？凜ちゃんと」

「……」

認めてもらう。

つまりはそういうことなんだろう。

「結婚する気は無いですが、凜さんとは付き合っていきたいと思っています」

“まだ大学生ですから、先のことはわかりません”

どっちの選択肢も、ヤクザの兄さんに殺されそうな台詞。

例え、説得力があるように、うやむやな表現で飾っても、言うて
ることは変わらない。

厄介。

とても厄介だ。

「まあ、付き合うときに普通、結婚なんて考えないよな」

空のコーヒーカップが置かれたテーブルに、慎吾の右肘が乗る。

明るみない慎吾の右掌に、苦笑う右頬が乗る。

「でも、どうするんだよ。このままじゃお前、現代では珍しく『銃
殺』されるかもしれないぜ？それが、コンクリート的なものを足首
に繋がれて、『溺死』とか？」

「……冗談じゃないよ」

全然、笑えない。

「まあ、死ぬことは無いにしてもさ。ちゃんと考えないとな。“選
択に迷う時には、その迷いにすら疑問を持つべきだ”ってな」

「何それ？」

「どっかの有名人の言葉」

慎吾はくくく、と意味ありげな変な含み笑いをする。

慶一は何とも言えず、ここに来て三度目の溜息をついた。

正直、考えたくもない。

何かを成就するために、障害があるのは、『物語』の中だけで良
かったんだが……。

慶一は頭を振って、想像上の怖い凜の兄貴を脳から追い出した。

「で、お前は俺に何の用だったんだよ。本々はお前の方に話がある
んじゃないのか？」

「あ？ああ、そうだったな」

慎吾は、完璧に忘れてた、って顔をする。その顔が内容の重要性
の低さを物語っているが、慶一は突っ込むのも面倒になり、身体を
俯せ、コーヒーカップに肘が当たる。

「で？何だよ」

「ああ……実はあるバンドのチケットがちょうど二枚あってな。――

緒にどうかな、って思ってたさ」

ほら見る。

電話で言えば一発で済む話をわざわざ呼び付けて言うものでもなかったじゃないか。

慎吾はこういう奴だ。

で、それを分かっているから突っ込みはしない。

「……何ていうバンド？」

「『lazy ant』っていうんだけどさ。俺もたまにサポートで入ったりしてるんだけど、結構良い感じなんだよ、こいつら」

そう言ってる割に、慎吾が妙に微笑しているのが少し気になるが、慎吾のギターがかなり上手いことを慶一は知っている。

音楽好きってことも。

だからハズレはないだろうが、『lazy ant』なんて聞いたことがない。

「予備知識ないぞ？俺」

「あー大丈夫、大丈夫。ていうかそいつらCD出してねえし」

「は？何それ？めっちゃめっちゃ新人じゃん」

「大丈夫だって。曲“は”良いから」

と、慎吾はまた苦笑した。

少し気になる言い方だったが、慶一は、ふーん、と相槌を言うだけにした。

「で、どうする？」

「……分かった。行くよ。で、いつあるの？」

慶一が聞くと、慎吾は、少し嬉しそうにニヤける。

「明日の夜七時。大丈夫？予定ないよな？」

「あーうん。大丈夫」

「じゃあ、明日、大学から直で行くから。こっからそんなに遠くねえし」

そう言っ、て、慎吾は立ち上がる。本当に話はそれだけらしい。

「じゃ、明日な。凜ちゃんの件、頑張れよ」

また中途半端なエールと、ニツ、と笑顔を置いてって、さつさとその場を去っていった。

別に一緒にここを出りゃ良いだろう、と思ったが、肘先の『もの』を見て慶一は納得する。

ああ、なるほど。

どうやら、コーヒークップは俺が片付けなければいけないらしい。

『ダークライト』：2

寝れなかったな。

慶一の胃がグルルと鳴った。

なんか、色々と考えることが多過ぎたし、一つも上手くまとまらなかった。

恐怖感は半端なく、昨日から睡眠機能が壊れかけ。

今日一緒に行く予定だったライブも、本当はキャンセルしたい。

身体の関節部分がいつもより軋んでる気がする。

α 波が出てるとリラックスするらしいが、多分0に近いんじゃないか。

(しんどいなー……)

頭がぼおつとしてる。

静かに揺れる空気は、夜になりそうになっていない時間帯によって冷たくなっている。

慎吾はまだ来ていない。

よく分らないが、『単独』じゃなくて『対バン』だから、お目当てのlazy antの出番が曖昧らしい。そのことが、集合場所に遅れる理由になるってことを慶一は判断出来ない。

現在、コンビ二前。

大学からそんなに離れてなくて、ラーメン屋は目の前。

なんか慎吾は、

「ちょっと用意しなくちゃいけないから、門の近くで待ってて」と言つて、にこやかに自分の家に帰っていった。

原付きで大学に来てたし、歩いてもちよつとの距離だから早く来るだろう、って思ってたけど、もう三十分くらい待ってる。

遅いなあ、と思いながらも、待っていること自体はそんなに嫌い

でもない。

パックの紅茶と、冷えたメロンパンを食べながら、遠くを見たり、近くを見つめたりする。

煙草は吸えないから、お金はそんなに使ってない。

地味に暇を潰していると、……ん？ギターケースを担いだ慎吾が現れた。

「あーすまん、慶一。家の鍵がどこにあるのか探しててな。まさかテレビの後ろにあるとは思わなんだ」

「いや、それは良いけど……。何、そのギター？」

黒いパサパサはためくギターケースは、慎吾の肩でガツチリと固められている。まるで高性能なランドセルみたいに、動いても揺れとかは無さそうな感じだった。

「ああ、今日はちよつとライブ後にスタジオに行く予定なんだよ。」

「ライブって、l a z y a n t の？」

「そうそう。だから、終わったあとに、ちよつと時間掛かけけど良いか？」

「良いか？、って言われても、わざわざギター持ってきてるんだから、ダメって言えないだろ。」

……なんて言わない。もう慣れた。

「ありがとな。じゃあそろそろ行くか」

慎吾はニツ、と笑って、ガサガサと歩きだす。
歩きだす？

「え？歩きなのか？」

「ああ。近いからバスで行くと勿体ないだろ？」

確かに近かった。

近いから良いってわけじゃないけど、こんな場所が近くにあるなんて思わなかった。

繁華街通りの裏の裏。

一人で通つたら、カツアゲされそうぐらいのアングラ度。
有刺鉄線に、蛇口の握り部分が転がっている。

設定温度が二、三度ぐらい下がってる気がするの、光が入らないせいなのか、単なる気のせいなのか。

明らかに危ない。

人が何故か居ない。カラスが似合いそうだったが、カラスも居なかった。

水漏れしてそうなプラスチックなパイプと、何かが焦げ付いた臭いも、変な緊張感を漂わせている。

慎吾はいつものニヤニヤの笑顔で、慶一はさつきから辺りを警戒していた。

さりげなく慎吾の後ろについていく。風が裾の先を抜けて、ヒュツと音がして、慶一の身体が震えた。

「こ、ここは大丈夫なのか？」

暗さと、汚さの作用で声が上がってしまった。

「大丈夫って何が？」

「いや……、明らかに人とか死んでそうな雰囲気だぞ」

慶一がそう言うのと、慎吾はハハッと笑う。

「そんなビビんなくて。日本は不景気だけど、平和なんだから」

「……フォローになってない」

空気が悪すぎる。ヘルズキッチンを中心なんて行ったことないけど、良い予行練習が出来そう。

「ビビり過ぎだって。たしかにここらへんは治安悪そうだけど、見せ掛けだけだから。誰も無意味に絡んできたりしねえよ」

「……」

今度はフォローになってたので、慶一は何も言えなかった。

確かにビビり過ぎだったのかもしれない。想像での凜の兄貴が、さつきから頭の中でちらついているからかもしれないが。

段々と暗闇へ。

明かりが薄くなり、空気も更に引き締まっていく。

この通りに入って十分。

さすがに目は闇に慣れてきた。

だから、曲がり角の先にあった明かりに眩んでしまったのかもしれない。普段なら気にも留めないぐらいの明るさなのに、暗闇の中心にあるそれは、不自然で、不気味だった。

それはドアから漏れる光だった。

デパートの非常口ドア。

学校の屋上ドア。

そんなイメージの白いパイプドアから、光の筋が地面に伸びていった。

その入口頭上三メートルに、『ホタル』って看板が飾ってある。名前の由来は何となく分かる気がするが。

「ここか？」

「おう」

慎吾の足と持っていたギターケースが止まる。慎吾の身体から出ている雰囲気少し変わった。

「ここは三年前くらいからあってな。一見さんはお断りで、友達の誘いとか、オーナーの人に気に入られないと来れないんだよ。だから取材とか、事務所のスカウト的な人は入れないから、ここでどう頑張っても、メジャーデビューなんて出来ねえのよ」

慎吾はしみじみと言う。慶一がふと、慎吾のその横顔を見ると、何故か笑顔が消えていた。

なんか哀しそうな、興味がなさそうな感じ。

「だから、プロ並の実力があっても、CDとか出してない奴とかいるから、結構凄い奴がゴロゴロと居るんだってこと」

「へえ……」

看板のペンキの欠け具合なんか少し気になったが、ドアから漏れる眩しい光と、横のコンクリート壁にスプレーで書かれた数々のバンドの名前が、“穴場”って雰囲気を造っている。

その名前の中には、誰もが知っていそうなバンドの名前もあった。
「ああ、なるほど。ここで力をつけて、オーディションを受けたりするんだな。登竜門的な場所なんだな、ここは」

慶一がそう言うと、慎吾は怠情っぽい微笑を浮かべた。

その顔に慶一は違和感を感じたが、慎吾はドアを開けて、さっさと中に入っていく。

……まあいいか。

慶一は後に続く。中を見てみると、チラシが落ちている床と、団地住宅の廊下のような造りの空間。その奥にはまたパイプドア。

しかし今度は、その前に中年の男が立っている。どうやらもぎりらしい。

慶一は久しぶりに人に会った、という錯覚を覚える。あの暗闇に慣れすぎたか、人見知りが激しくなったように心が揺れた。

慎吾はギターケースのポケットの中から、黄色いチケットを二枚取り出す。手づくりなのか、非常にシンプルだ。

それを男に渡すと、男の皺枯れた指がそれを確認して、折り目をちぎる。猫背で、ちよつと不健康な男は、テレビに出てくる、ホラ

ー映画の墓守りみたいだ。

「おっさん、まだレイジー終わってないよね」

「……ああ。多分、次だろうね」

返事も乏しく、慎吾は鼻を鳴らして、チケットの半分を受け取る。パイプドアが振動している。

シャウトと残響音。

どこかのバンドがライブをしているらしい。

慎吾は面白くなさそうに、慶一はドキドキしながら、二人はドアを開けた。

そんなに人は多くなかった。

百人いるかいないくらいで、少なくとも、四人はステージにいる。

その境目に、バリケードとか何にもなかったのが気になったが、今はいらないうてのが分かる。

爆音と静寂。

両極端の世界がそこにあった。

まあ、何てことない。

バンドは物凄い音を出して跳び回ってるのに対し、観客はつまらなさそうにメールを打ったり、欠伸をしたりしている。

「……何これ？」

バンドに対する回りの視線が冷た過ぎる。あまりにも興味のない装いは、どこか滑稽でもあった。

「ま、こういうこと」

そう言つて、慎吾は珍しく、肩をすくめる仕種をした。

「実力が全て、って言いはおかしいけどな。中途半端に実力があっても、感覚麻痺して、大して盛り上がれなくなってるんのよ」

それは……、バンドにとっては良いことかもしれないが、今の状況は演奏している奴らにとって可哀相過ぎるんじゃないか？

慶一が聞くと、また珍しく、慎吾が肩をすくめた。

「まあ仕方ねえよ。『銀牙』だっけな、今やってるやつ」

そう言つて、今度は嘲るように鼻で笑った。

「175R気取りで、青春謳歌した感じの歌ばっか歌ってる。明日に向かつて進めとか、未来があるから頑張れるとか、アイドルじゃねえのにそんなんでも感動すると思ってるのかね。尊敬する歌手はブルーハーツってか？格が違うってことに全然気付いてねえよ、こいつら」

暴言と例えを津々浦々出してきて、吐き捨てるように言った慎吾は、後ろ髪をボリボリと搔いている。

慶一にはその『銀河』というバンドの悪さがわからなかった。むしろ、中々良いんじゃないかと、軽く思っていたが、慎吾の話を聞

いたら、このバンドが凄くダサく感じたりもした。

感情が移り変わる。

そんなぐらいい、『銀河』への想いは“微妙”ってことだった。だからこいつらはこんなにも評価が低いんだろうか。

やがて演奏が終わり、『銀河』はいそいそと、舞台袖に帰っていく。拍手はあったが、疎らで、社交辞令さを『銀河』に分からせるように叩いてるみたい。

同情するよ。

慶一はあらためて、『銀河』には頑張ってたほしいと思った。

「さあ、次だ次。本番だ本番」

慎吾は嬉しそうに、ニヤツと笑う。ようやく慎吾らしい表情が戻ってきたようだ。さっきまで珍しく大人しかったのに。

観客も騒々しくなる。座っていた人は立ち上がり、メールを打っていた人は携帯の電源を消しはじめた。

期待。

その二文字が雨のように降っては、全身ずぶ濡れ状態で、みんなが目を輝かせている。

誰もが待っていた。

『l a z y a n t』を。

(よっぽどだな……)

そう思いながら、慶一も逸る気持ちを抑え切れなくなっていた。すると急に、ライブハウスの右端にいた観客が歓声を上げる。それはウェーブするように、すぐに左端まで伝染した。

ステージに一人の女の子がやってきたのだ。

『ダークライト』：3

歓声が波のように這っている。

さっきまでのダラダラしていた客が嘘のよう。

人が動くと、一人一人の面積に変化が出て、百人が千人に見える。ていうか、元々そんなに居たのかもしれない、って錯覚。

その女の子は右目に眼帯を付けていた。

よくある脱脂綿みたいなじゃなくて、ちょっとパンク系のファッションの要素がある布で作られたもの。柄は遠いので分からないが、“柄が付いている”ってことは分かる。

でも服はTシャツにパンツというカジュアルな格好で、V系とは違うみたい。だから、あの眼帯が何を意味するのかは分からない。彼女はつまらなそうな顔をしていた。

盛り上がるライブハウスに相反して無表情。欠伸でもしそうな程に怠惰。早く終わらせて帰りたい、って雰囲気。

その女の子は慶一の予想に反して、ドラムセットの椅子に座った。この女の子がドラムスらしい。

再び歓声。

今度は二人出てきた。

両方、女の子。

一人はハーフみたいな端正な顔立ちで、背が高くスタイルも良い。なんかニコニコと笑っていて、微妙に顔の左端が引き攣っている。

もう一人は、緩そうな目元と、耳が尖んがってそんなエルフ顔。歩いている姿がどこかぎこちない。緊張しているのだろうか。

ハーフはギター。

エルフはベース。

それぞれが定位置に付いて、ピックをポケットから出す。つてか、さつき『銀河』が使ってたやつと同じやつを使ってる。

「おい、慎吾」

「ん？」

「あのさ、ギターが前のバンドと同じやつなんだけど、どういことと？」

「ああ……多分、借りてるんじゃないか？あいつらは楽器とかに執着しないから」

慶一は、そういうもんなのか？と疑問に思ったが、そこら辺はあんまり詳しくないので、何も言わないことにした。

三度目の歓声。会場が一番大きく振動した気がする。
今度は男だ。

彼がボーカルなんだろう、ステージのセンターのマイク前によそよそしく立っている。心なしか、緊張しているようにも見えた。顔立ちは結構良い。

少し幼いがマイナスではない。ミュージシャンで“居そう”な感じ。ただ、かなり不健康っぽい。

何故か、右手に包帯が巻いてある。

趣味か、ファッションか。少し血が滲んでいるから、怪我かなんかしたんだろう。

ようやく全員が揃った所で、メンバーが楽器と向き合う時間。ジャ、ジャ……と不規則だが、心地いいギターの音が流れる。チューニングってやつだろう、慶一もそれぐらいは知っている。

その時間帯に流れる会場の空気は異様だった。

期待感が目で見えそうなほど、濃密に『ホタル』の腹の中で入り混じっている。

まだ一曲も、ていうかステージに出てきて、l a z y a n tのメンバーは誰一人として喋っていない。観客なんて最初っから眼中にないのか、挨拶も、トークも、全くする気がない。

それなのに、興奮と緊迫は原子レベルを越えた素粒子にまで伝わっているようだ。慶一の胸もそれに合わせて高鳴っている。

チューニングが終わる。

ボーカルはマイクをトントンと叩いて、軽く空間を振動させる。

「あ、あー、あー」

ボーカルの声が断続的に響く。

その瞬間、耳が痛くなるほど、会場が静かになる。

唸りも、咳も、溜息も。

その小さな針で割れてしまいそうなほど、静寂はパンク寸前まで膨らんでいく。

ボーカルは溜息をつき、ドラムスがスティックをカッカツ、と鳴らし、メンバーに合図を送る。

歌が始まった。

『ダークライト』

秋月が陰るような
覆うのは雲じゃなくて
地球、そう自分自身
太陽から隠している

黒炭で塗り重ねた
左胸のその中心
そこに何があるか
もう分かつてるんだ

何がダメで何が良い？
雨で壁が剥がれている
諦めたくないのに
諦めなきゃいけないのかな

僕は最低です、と
言えば楽になる

そう思ってるつもりでいたけど
後味は鮮明に残ってしまう

あなたでも、誰でも
クリスマスの聖鐘でも
苦虫の銃痕でも
昨日のテレビでも

僕は繋いでいたいんだ

コーヒーの白さは
異次元の明るみは
手を伸ばしながらも
木を植えながらも
どうにかして、残して

淋しくはないけど

一人でも生きていけるけど

僕の、僕の為に

少しは無理してほしいと

醜くても、崩れ落ちても

どこかでそう思ってるんだ

たまに後ろから

おどけた風に抱きしめて

僕の、僕の事は

忘れないままでいてよ

すぐに失いそうな

また消えてしまいそうな

そんなものが僕の

『唯一』になつたとしても

いつも持っていたい

いつも持っていていよう

心に刻んで

——ライブ終わり一時間後。

時計は夜の九時辺りを指している。

l a z y a n t のライブはたった三十分だけの短いものだった。
十曲もやっていない。

新人だから仕方ねえよ、と慎吾は言っていた。だからそういうものなんだろう。慶一も何となく納得してしまった。

でも、まだあの時の衝撃が心の中に残っている。

身体中がちぎれるかと思った。

観客の頭が波打って、光の加減で海の断片にも見えた。
窮屈さを感じた。

観客が元々少ないので、人と人の間に余分なスペースが出来ているはずだったが、l a z y a n t の音楽がその隙間に滑りこんでいる。

顔の筋肉や、身体の一部が活動を止め、ただ見て、聴くことだけに集中させられる。脳が、余計なことを考えさせなくなっていたみたいに、時間がピタツと止まってしまった感覚が慶一にあった。

ギターってあんな音が出るんだ、と思うぐらいの乱暴な掻き鳴らし。最上級の悪党を見た時のような、心地いい不愉快さ。

ドラムはおおざっぱで適当。眼帯で隠れていない左目も使ってないような気がするほど、無心で乱打、乱打、乱打。

ベースはそんなドラムに合わせるよう、リズムを丁寧に刻んでいる。一音、一音を拾い集めて、乱雑になったメロディを導いているようにも見えた。

残酷なギター。

怠惰なドラム。

堅実なベース。

それに呼応するかのように、ボーカルの掠れた小さな声が、弱々

しく響いてくる。

吐き気すら催す。

醜く腐った果物と対面した感じにも似ている。

決して、安心や共感を得るようなものでは無く、ただ“感情の嫌らしさ”だけが伝わってきた。

これは感動と呼んでも良いのかは、正直分らない所だが、少なくとも心を奪われたのは確か。とにかく生涯忘れることが出来ない音楽。

慶一は人生の三十分をlazy antに奪われてしまった。

小さくて丸い、磨りガラスの窓に、慎吾は頭を預けている。ワックスが塗られた床が綺麗で、黒のギターケースが上手に映っているほどだ。

『ホタル』からそんなに離れていないのに、穏やかな雰囲気があるのは、やはりあの空間が異質だったからだろうか。

現在、慶一と慎吾は『nana studio』というスタジオに来ていた。

「すまん。ここまで付き合わせて」

慎吾はさつき自販機で買った、ブラックコーヒーを飲んでいる。

好きなんだろうな。昨日も食堂で飲んでいたし。

「気にしなくていいよ。lazy antの人達にも会いたかったし」

慶一もペットボトルのお茶を買って飲んでいる。珍しく、慎吾の奢りだった。

壁には穴が空いている。多分、防音の役割を果たしているんだろう。スタジオっていうのはそういうもの。

これから、lazy antに会えるらしい。慎吾も入れて、こ

ここで練習するらしいのだ。

慶一のお茶が空になる。ここに来て、もう二十分。時計は九時半辺りを指している。

「遅えな」

慎吾はボソツと呟いたので、慶一は慎吾に目を向ける。

「何時に来る予定だったんだ？」

「九時半。でも、あいつらは……ていうかニヒラは三十分前にいつも連絡してくるんだけどな」

「ニヒラ？」

「仁平。仁平灯子。ベースの奴。あいつは真面目だから時間に遅れることは無いんだけどな」

慎吾はトントンとリズムをとるように、爪先で床を叩いてる。慎吾がヒマな時にする癖だ。

「まあ……真面目過ぎるつてのもあるんだろうけど」

少し苦々しい表情を浮かべている。なんか、嫌なことを思い出したようだ。いつも馬鹿みたいに笑顔なのに似合わない顔をしている。

慶一が不思議に思っていると、後ろから、ギイイと錆び付いたドアの開く音がした。

『ダークライト』：4（前書き）

文章力とか模索中なので、前より長く感じるかもしれませんが、気にせず見てください m (——) m

『ダークライト』：4

「あ、し、慎吾」

黒髪と、その先端がドア外から現れ、何故か申し訳なさそうな感じの掠れ声がかかる。少し青みがかった黒いギターケースと、白地にかっこいい『D』の文字が描かれてるTシャツを着た男が、ワックスで輝く地面に映ってきた。

「おー、遅かったな。光」

と、慎吾が手を上げると、光と呼ばれたその人も弱々しく手を上げ返す。その苦り切った表情は、ライブのステージでチューニングをしている時に見た記憶がある。

現れたのはlazy antのギター&ボーカル。

なんか微妙に取っ付きにくそうな雰囲気が出てる。やっぱり“拳動不振過ぎる”ってのがあるんだろうな。酷く寝れて不健康な感じもあるし黒目が泳いでいて、その目の下には立派な隈が出来ている。化粧しすぎて目の回りが黒ずんだ馬鹿な女子高生みたい。ピエロよりパンダなイメージが強いラブリーな感じ。

ああ、うん。顔立ちが悪くない。陰だらけのオーラは女性にも受けが良さそうな感じがしないでもないし、子犬みたいに鼻をスンスン鳴らしている姿は、愛玩動物そのもので、母性本能を存分に擦らせることが出来るんじゃないか。

勝ち負けないし、『音楽』というステータスがあるこの人の方が、慶一より何倍もの存在価値があるという事実。だから、慶一はこの情けなさそうな男に対して、畏怖と敬意を感じずにはいられなかった。

慶一は備え付けのアンプの上に座っていたが、芸能人に会ったときのような焦躁に近い早さで立ち上がる。急に来たから、ってのも大きかったのだが、端から見たらただのファンのリアクションだ。

「あ、お、遅れてごめん。ち、ちよつと、お、送つてて」

と、吃りながら必死に言葉を繋いでいく。慎吾は聞こえにくいはずなのだが慣れているのか気にしてないようで、鼻をふんつと鳴らし、

「送る？」

と、ちゃんと聞き取れている。

「と、灯子が、き、今日は早く、か、帰らないと、ダメ、だ、だつて」

灯子……はベースの人だったかな。その人が今日来れないらしい。微妙に聞きとりにくくてはつきりしなかったが。

ていうかビビり過ぎ。本当にこの男が、あの時歌っていたボーカルなんだろうか。

でもセンターで歌っていたから、メンバーの中で一番はつきり見えていたし、右手には血の滲んだ包帯も巻いている。照明が暗い『ホタル』の腹の中でも、顔が全く見えないってことはない。

この人なんだ、って核心もあるにはあるし、……まあこの人なんだろう。ただの怖がり？人見知り？

ていうかスタジオには自分以外に二人いることをとくに気付いているはず。だって慶一のことをちらちらと見たり見なかったりしている。

「……あ、あれ？え、えーっと」

でも、話しかけないと前には進めないってこと。ボーカルは慎吾と慶一を見比べ見比べする。

「ああ。まだ慶一も名前は知らなかったな」

慎吾はそう言って、視線をボーカルへ。そこでまたビクツと引き攣り、目がクロール。

自己紹介していいのか？

慶一はあまりのビビりっぷりに戸惑ったが、少し咳込み、

「どうも、慎吾の友人の紀藤慶一といいます」

よろしく、と手をのばす。

身体がビクツて素早く反応。黒髪が揺れる。余計な敏捷性が無駄にありそう。握手のつもりだった慶一の右手は、淋しい状態で握り返されず、思いつきりスカされる。

「あ、あ、か、柿崎、ひ、光です」

柿崎光……かな？

吃り過ぎて聞き取りにくい。

柿崎光は慶一が差し出した手をちょん、と触ってすぐ引つ込めた。よろしく、は言っていない。

俺は猛獣か、とダサイツツコミを心の中でして、行き場を失った右手で頭を掻く。打ち解けるまでに結構時間がかかりそうだ。

「他の奴は？」

慶一と光の挨拶を見ながら、微苦笑していた慎吾がおもむろに言った。

「あ、み、美雪は、ぎ、『銀河』のベースの人に、さ、誘われてた」

「『銀河』ってお前らの前にやってた奴らか？」

慎吾が聞くと、光は小さく遠回りをするようなカーブっぽい頷きをする。

「何、考えてんだよ……。で、そのまま付いてったのか？」

「い、いや。そ、それは、わ、分かんないけど」

と、光は隈付きの目をフローリング床に落とす。震えているのが喉だけじゃなくなっている。

ビビり過ぎだよ、絶対。

「……波崎も相変わらずだな。優は？」

「ゆ、優は、じ、自販機で、ジュ、ジュース買うつて。だ、だからもう少しで来……」

ドアがギイイと開いた。

雪のような白い手と一緒に、現れたのは眼帯を付けたドラムスの女の子だった。子供？と慶一は最初思ったが、光や慎吾の待ち人来た

る的な態度変化にこの女の子がメンバーの一人だつてことに気付く。あの時はステージまで遠くてよく見えなかったが、距離が近い現在であらためて見ると、背がかなり低いことに気付く。童顔で華奢、中学生にも見える。とても、ドラムを乱打乱打していた女の子とは思えない。

髪が結構長い。背中の中分まで伸びていそう。確かライブ中はポニーテールだったような気がするが、今は解いている。柿崎光が黒髪に対して、茶髪と金髪が混ざったような、よく分からない髪の色をしている。

眼帯の柄はさくらんぼ。かわいらしいプリントだが、その横にある瞳が異常に暗い。黒目の濃度が半端じゃないって感じの、大きくて深い目がさくらんぼを馬鹿にしてるようにも見える。

「あ、どうも……」

こんにちは、と慶一は咄嗟に挨拶をしたが、女の子は完全シカト。眼中に無い、って態度すら無い。

なんか無表情っていう表情が前面に出過ぎ。

氷の仮面？鉄の女？

名もなき威圧感が女の子の回りに漂っている。

「水城、波崎の奴は？」

答えをあまり期待してないようなトーンで慎吾は聞いた。

ああ、この女の子はどうやら水城って名前らしい。さっき慎吾と柿崎光が『優』って呼んでいたから、この女の子の名前は『水城優』なんだろうか。

水城優は話し掛けられても、聞こえない振りの最上級とも違う、本気でどうでもいいって思っているように慎吾を見る。

「知らない」

と、一言で済ませようとする。

慎吾は動揺もせず、髪を掻きながらちよつとだけの歯ぎしりをする。慣れているんだろうな、普通はもつと苛々するもんだ。

「知らない、じゃ済まねえよ。今日は灯子もいねえんだろ？それプ

ラス美雪が来なかったら練習に無んねえじゃん」

慎吾はもつともな意見をぶつけるが、優は興味なさそうに冷やかに慎吾を一瞥するだけ。息をしているのかどうかも分からないほど、口と鼻の“動かなさ”は極限に値する。

何かに嫌がつてる感じがする。

多分、『怠惰』って言葉を人間性で現そうとしてるんだろう。究極の面倒くさがりは、今日の練習も波崎美雪にも興味を持ってないんだろうか。

慎吾は、珍しく苦々しい表情になり、珍しく舌打ちなんてことをする。

なんか、今日の慎吾はいつもと違うな。分かる気はするけど。

「なら、どうすんだよ。折角、慶一も来てくれたのに、ここで解散はないだろ？」

と慶一を親指で指しながら言った。

そこで初めて、隠れていない冷たい左目に慶一の顔が映った。

誰？、って言うてるのか、優は慶一をじっと見ていた。

「あ、ああ。えっと……、紀藤慶一っていいいます。慎吾の大学の友人で」

なんか握手も出来そうに無いんで手は出さない。ある意味、柿崎光より話し掛けにくい。

なんかもう喋りたくもなさ気な優は、左目を瞬きしてこめかみを中指で擦る。

変な仕種。似合ってるけど。

「で、どうすんだよ」

慎吾は諦め半分、辟易しながら言う。気分も少し悪くなってるみたい。

優は無表情のまま慎吾の方を向く。目が少し細くなって、怠そうな声で、

「大丈夫と思う」

根拠の無い憶測が慎吾を俯かせる。優は話も済んだっていうスタ

ンスで、座高ぴったりのアンプに腰掛ける。

なんだかな。

慶一もこの不思議な空気にどうしていいか分からず、天井を見つめて、床を見つめたりする。どっちにしろ、波崎美雪を待たなきゃ練習は始められないらしい。慶一は少し伸びをして、さつき飲み干した空のペットボトルをごみ箱に捨てようとした。

三度目。

ドアがギイイと開いた。

「ごめーん！遅れちゃった！ちょっと変な奴に絡まれてて……」

場の空気とかなり温度差がある声が、ドアの内外に突き刺さってくる。防音壁ってこういう時に役に立つのかな、って塩梅が慶一の頭に現れるが、このスタジオに現れた女の人の方に優先順位が行ってしまった。

美人だ。美人過ぎる。

ハーフってのはこういうことなんだろうか。彫りが深くて鼻が高い。もちろん二重でモデル並にスタイルも良い。ライブで見た時と比べて、距離が近いからどうしても細かいパーツが鮮明に見え、がっかりするパターンが多いのだが、逆に改めてその美貌に気付かされるってもの。彼女が持っているギターケースがぼやけるくらい。欠落がない完璧な顔立ちをしていた。

「あれ？あなた誰？」

女の人は慶一にすぐ気付いて近くまで寄ってくる。ここらへんは柿崎光と水城優とは違って、思いつきり虚を突いてくる。慶一は自分の心臓が早くなっていくことに気付いてないほど、意識、身体が硬直してしまってた。俺には凜がいるから、って暗示をすぐにかけないといけない。

「ファンの人？それとも『銀河』の誰か？どっちにしても今から練習だから、相手出来ないんだけど……」

「そいつは俺の友達だ」

と、横から慎吾が説明してくれる。女の方はへえー、と言いながら慶一の身体をじろじろ見回す。

「ってことは大学生？ 慎吾と同じ大学？」

「えっ！ あ、ああ、はい。紀藤慶一っていいいます」

照れと、いたたまれなさで、声がぎこちなくなる。かなり情けなかったが、気にしてなさそうに、ニコツと笑われ、

「私、波崎美雪です。海の波に山崎とかの崎で美しい雪。ギター担当で曲とか作ったりしてます」

よろしく！ と握手を求めてきた。

まさかの逆パターン。慶一は柿崎光みたいに、ビビりながら恐る恐る手を合わせる。女の子っぽい柔らかい手が合わさって、心臓が更に跳ね上がる。純情過ぎ？ って自嘲感が慶一の脳裏に浮かぶが、
(痛っ……！)

慶一の手の手関節がポキッと音を起て、一瞬顔をしかめる。

波崎美雪の握力が意外に強く、ギュウツという音がしそうなほど握りしめられていた。

ギターリストって握力強いのか？

慶一は引き攣った笑顔、美雪はニコツと満面の笑顔でそれぞれ手を離す。

「で、何してたんだ？ 絡まれたって」

「あー、なんか変な奴に絡まれたのよ。『銀河』ってののギター担当の奴に」

美雪は何故か笑顔で、手で団扇を作って顔をハタハタと仰ぐ。走ってきたのか、よく見る（変な意味じゃなく）と汗が少し滲んでいる。

今更に気付いたが、首元に銀のネックレスを付けていて、汗を吸収してる

あれ？ ていうか柿崎光は『銀河』の“ベース”に誘われたって言うてなかったっけ？

慶一が光の方を見ると、何故かさつきよりぶるぶる震えている。美雪が来てからか、その顔は少しテンション落ち気味。

「あ、慎吾！そういえばさ、新しいドラムの件、決まった？」

タン、タツと美雪のブーツの足音がスタジオ内に響く。

「んーああ。もう少して決まりそうだ」

「へえ……どんな人？」

美雪は慎吾の顔を笑顔で見ているが、美雪の顔を慎吾は苦々しく見ている。嫌ってるって感じじゃないけどあんまり話したくなさそう。柿崎光や水城優に比べたら波崎美雪はマシなんじゃないか？誰とでも仲良く出来る慎吾にしては珍しい。

「半田菜緒っていう女の人だけだな。『パドリング』っていうバンドのドラムやってたんだが、もう解散したからサポートで来てくれるらしい」

「ふーん……、上手いの？」

「さあ？でも『パドリング』って名前は前から聞いたことあったから、それなり上手いと思う」

曖昧な紹介の仕方だったが、美雪は言い出しつぺなのに興味なさげな相槌を打って、光と優のちょうど間に担いでいたギターケースを置いた。地面がドンツて音を起てて、それと同時に光の身体が張り、優の左目がそれを映す。

慎吾は溜息をついて、自分のギターケースからギターを出し始める。優も面倒くさそうに立ち上がり、面倒くさそうに部屋の奥にあったドラムセットに座る。スティックは椅子の裏側の下に設置されていたようだ。

「光」

何故か慶一の身体が反応した。その声が慶一や慎吾に宛てられたものよりも遥かに冷たかったからだ。

呼んだのは美雪。さっきまでとは別人の声。

声をかけられた光はビクビクしている。喋ることすら出来ないようだった。

美雪は笑ってる。

ああ違う。さっきまで見せてくれたのは“爽やかな笑顔”だったが、今度は“心からの笑顔”だ。

慶一は立ち位置的に横顔しか見れなかったが、彼女の頬の引き攣り方は半端じゃなくなっている。

美雪は光の前まで来て、ニコリと笑って無機質に、

「ちよつとトイレまで付いてきて？場所が分かんないから」

美雪はまたニコリと笑う。

光はぶるぶる震えている。貧乏揺すりが止まらない。

光はギターケースをその場に置いて、トンツという音が響く。

そのままドアを開け、美雪はその後に続いてドアを閉める。ギイ
イって音が慶一の耳で長く続いた。

「気にするな」

慎吾は苦々しい声で言う。

「いや、どう考えてもおかしくないか？」

声が上ずってる。何をそんなに焦ってるのか慶一自身も分からない。美雪はまだマシだって信じたい気持ちがあるから？

慎吾は白々しく、

「何が？」

「いや、だって……」

唾がゴクツてなる。

「だって“トイレはスタジオの入口の真横にある”んだぞ？」

それをわざわざ聞くのはおかしい。理由は大人だからってことで何となく分かっているんだけど、急だったから頭がパニックってる。

あの二人、“そういう関係”だったのか。

「ああ、もういいんだ」

慎吾は溜息に諦めを混ぜて吐いた。もう、どうでもいいって感じ

で。

だからそんな顔は似合わない。

慎吾の指が鼻先を擦り、優をちらつと見てまた溜息混じりに呟く。

「あんまり気にするな」

しわくちやの右袖に夜風が吹き込んでも、そのまま公道を歩いてみる。アスファルトの黒ずみは、慶一の鈍重なステップで音を奏でる、ハタハタと鳴らした足音ミュージックは明日には全て忘れ去られてしまっただろう、そういうもの。

柿崎光と波崎美雪のその後を慶一は見えていない。

「今日は結構遅くなるから先に帰れば？」

っていう慎吾の一言に慶一は素直に従った。ギターとドラムスだけの練習を見せてもしようがないという、慎吾のいたたまれない感情があつたのかもしれない。

トイレ前を通つたが、入口からドアまでに奥行きがあつて、変な喘ぎ声とかそんなのは聞こえなかった。それが良いことか悪いことかは分からないけど、慶一は少し尿意を催したのにトイレ行くことはしなかった。

夜の小路、アスファルト。鼻歌は今日のライブの一曲目に演奏されたもの。タイトルは知らない。慎吾に聞いとけばよかった、と後悔をしながら、もう閉店してしまつた本屋の横を通りすぎていく。

急に凜に会いたくなつた。

兄貴の問題とか、結婚の問題とかを全部無視して、ただ単純に凜に会いたくなつた。

波崎美雪っていう美人に目が眩んでしまつたから？

自分には彼女がいるっていう自覚が欲しかったから？

どっちもだろうし、それだけじゃない。ただ弱さが半開きになつた状態で、このまま全てを諦めてしまふ前に凜に閉めてもらいたかつたんだろう。

本気じゃないのかな。

ただ好きだからって理由で付き合ってたんだけど、それなら波崎美雪はどうなるんだろう。美人を見て何かを期待して、その美人は他の誰かと付き合ってたなんて、よくある話の一つ。でも状況が状況だし、基本は柿崎光のようにビビりなんだ。ヤクザの兄貴に何回殺されたら気が済むんだろう。凜もとつくに愛想尽かしてる。

鼻歌はサビだけを奏でていく。他の部分は覚えていない。

モラトリウムな慶一の頭に、l a z y a n tの音楽がモルヒネの代わりをしてきている気がする。

なんか、もう一度あのライブに行きたくなった。あの場所なら全てを忘れられそう。爆音でもなければ静かでもないあの場所、あの時間にもう一度行ってみたい。

慶一はふと、サビ終わりの気持ち良い部分を切ってから足を止め、ポケットの携帯を取り出す。

電話帳とラ行とペケペケ鳴るボタンの音。決意……とは違うけど、話しておくことがあった。

プルルルルと鳴る音が漏れないように……って周りに人は多くない。

電話はガチャッと呟いた。

『……はい、もしもし』

「あ、俺だけど」

声が少し緊張して震える。人見知りってわけじゃないが、鼻奥で息を吐いて、噛まないように頑張ってみる。

『うん。どうしたの?』

凜は電話の向こうで、少し声を弾ませてくれた。

「ちょっと話したいことがあって……。大丈夫?寝てなかった?」

『うん、起きてたよ』

「あ、そう……。あのさ、ちょっとあの件で話したいことがあったさ」

『あの件って?』

「凜の兄貴の話」

途端に慶一の身体の中で、イケナイコトをしたような感覚が生まれる。

『……………』

凜は無言だった。携帯の電池パックが急激に冷えていく。

慶一は焦りを覚えて、

「あつ、いや、別れようとかそういう話じゃないんだ。ただこのままにして置くのもアレだと思うから……」

『……………？』

多分、あつちは別れを切り出されるって思ったんだろう。

電話越しにキョトンとするような疑問付を微かな声で表すような音が聞こえた。

慶一は勿体振るように咳込み、じんわりと緊張が滲み出てくるのを感じた。切り出してしまった感があるから、気分がハイになって、呂律が回るか心配でもある。

「俺さ、やつぱり一回会ったほうがいいと思うんだよね」

『……………え？』

凜は胸が潰れたような変な声を出した。

「だって、その……付き合ってるんだからさ。挨拶ぐらいしときたいし」

慶一は言ってる間に、照れ臭く感じて、眉間を指の腹で擦った。その指が恐怖か何かでブルブル震えている。

『本当に？』

「あ、うん。ちょっと遅かったかもしれないけど」

目が渴く。ああ、言ってしまった、っていう感覚が非常に強い。

電池パックが熱を帯びる。

凜はとても嬉しそうに少しだけ噛みながら、

『あ、じゃ、じゃあ明日の昼、食堂で会わない？』

「うん？」

『色々決めとかなきゃいけないでしょ？だから明日の昼に、ね？』
なんか凜の笑顔が、向こうで輝いている気がする。慶一は電話で

話してしまったことを本当に後悔した。その笑顔が見たかった。

「ああ……うん、わかった。食堂ね」

「うん。先に待ってるから」

いい言葉だ。

心がムズムズする。

「じゃ、じゃあ明日。また電話するから」

「え？……あ、うん」

もう終わり？って感じの淋しい声。

「じゃあ……また」

「うん、またね」

電話がブツツ、って呟いた。

サブタイトルに『ヤクザと大学生』ってつけとけばなんとかなる気がするのは、AVやつまらない新連載の物語だけで、くたびれた靴紐をつけた緩く冴えない現実には全く合わない。子供にゴムボールを投げられて、ごめんなさいの一言をかけられて、草のにおいにする河原沿いの朝の砂利道を通ったのは数時間前。

また、このドアだ。

プラスチックか木製かわからなくて、意味の分からないアクリル付きの煩瑣的大学食堂のドア。鬱陶しいくらいファッショナブル、ドアノブが綺麗な曲線を描いていることに今初めて気付いた。

気持ちが悪くて重い。

未来の暗さが現在に侵入している。

慶一はそのドアを開け、一昨日に慎吾が座っていた場所に、凜が慶一に気付いて手を振っている姿が見えた。

「ごめん、待たせて」

「ううん、そんなに待ってないって。もっと遅くなるかと思ったぐらい」

凜は目をしばしばとさせて、愛らしいくらいの笑顔を零す。掬い

もせず、拾いもせず、ただ日本語で話し掛けられた外国人みたいに引き攣った笑顔で返すだけになってしまう。椅子がゴリツと胡麻を杵で潰したような音で、慶一は凜の目の前に座った。

「講義終わりからまだ五分か十分でしょ？早かったね」

「うん、時間通りに終わんなかったから。教授がせっかちで」

いつも通り、慶一は何も頼まない。お金がないし、ここのご飯、飲み物はあんまりおいしくない。

「そうなんだ……。ああ、で……。話、していい？」

「え？ああ、うん」

戸惑いは様々に、テーブルの黄ばんだ染みがメスライオンのシルエットに見え、慶一のことを喰いたそうにしている。

凜は化粧つ気のない顔で、肩をすばめている。

「お兄ちゃんね。今日の朝に電話がかかって来てさ。私、慶一が言った言葉が嬉しくて、つい昨日の夜のこと話しちゃったの」

凜は申し訳なさそうな表情になるが、ここで怒るほど人間が出来てないわけじゃない。慶一は左頬を吊り上げる奇妙な笑い方をすることができた。

「で、何て言ってたの？」

「うん、なんか慶一と一度話をしたいらしくて、明日会えないかどうか聞いてみてって」

「明日！」

「うん、早いよね……。でもお兄ちゃんは早めに会いたいんだってその……。友達と会う約束があるんだって」

気をつかってヤクザ用語を出さなかったが、早い話それっぽい事務所かどこかで他の組との抗争対策を練るために、集会かなんかを開くとかそういうのだろう。小指でも切り落としてくるんだらうか。「でも、明日って早いから、私断ろうとしたんだけど……」

「あ、ああいいよ。うん、大丈夫」

ビブラートがかかった淒く情けない声が出る。凜の死角には慶一が貧乏揺すりをしている足があつて、さっきからテーブルの裏にち

よくちよく当たっていた。

「……本当に？」

凜はそんな慶一を心配して、泣きそうな感じの瞳で慶一の顔を見る。

「大丈夫……じゃないけど。大丈夫」

訳のわからないことを呟いて、慶一はニツと笑った。それは清々しいものではなく、苦笑いの苦みが濃くなっているような気持ち悪い笑い方で、凜の心配するような顔が更にもう一段階上をいった。

沈黙。

二人の時間が長くなって、慶一の貧乏揺すりと呼吸だけが時間を進めていく。隣でおいしそうにオムライスを食べている（そういえば一昨日も来ていた）カップルがこの中途半端で下らない食堂に適応していなくて、ここが好きじゃない慶一の沈みきった猫背が、無駄にテカった白タイルの地面に上手く溶け込んでいる、っていう矛盾。

「……あのさ」

三文字じゃなかったら聞き取れなかっただろう、凜は口の中だけで小さく呟く。

「なに？」

「……お兄ちゃんに会ってさ、何を話すつもりなの？」

少なくとも威圧感あるように言う。水城優みたいで怖い。

「何って……」

「『妹さんを僕に下さい！』みたいなことを言うの？」

凜の声が昨日のライブ三曲目のようにクレッシェンドしていく。怒ってるのか、泣いているのか。僅かに震えている肩とうつむいてつむじしか見えない頭だけじゃ、慶一には区別がつかない。

「それは……」

「結婚する気で付き合ったなんて思ってないけど、遊び半分だとしたら、嫌だよ」

「……そんなことないよ」

「じゃあ何て言うの？お兄ちゃん厳しいから、絶対に許してくれないよ？」

ガタツと隣のカップルが席を立つ。楽しそうに笑う声と、馬鹿みたいにどうでもいいことで盛り上がる声が、混ざって聞こえた。

「私は……慶一に死んでほしくないの」

物騒なことを言う。ていうかその可能性があるってのが凄い。

「私とさ、結婚する気が無いならお兄ちゃんと会ったのやめといった方がいいよ？会っちゃったら顔覚えられるし、私と別れたいなら、慶一のことは私が“ふった”ってことにしといてあげるから」

「えっ……！」

「慶一だっと思ってるんでしょ？私と付き合わないやよかつたって」ズシツと鉄管に押し潰されたように、血流が体外に飛び出たような感覚。

ああ違う。

シヨックじゃない、シヨックじゃないよ。

決して凶星なんかじゃなくて……

「そ、そんなこと言うなよ！」

こういう時、周りの目を気にする冷静な自分がいることに腹が立つ。怒気を含ませながらも、声は普通の大きさ。

「そりゃ最初は物凄くビビったし、今もちよっと怖いけど、凜のお兄さんが、ヤ、ヤクザかどうかなんて関係ないよ！俺は……」

声が震えてる。

やばい泣きそうだ。

「俺は、凜のこと好きだから。だから……大丈夫だよ」

「……」

凜が顔を上げる。目の周りが赤く腫れていて、頬が一直線だけ滑り悪く渴いている。

やっぱり、さっきまで泣いていたのか。

途端に『大丈夫』なんて曖昧な単語を引っ張ってきた自分が恥ずかしくなった。凜は多分、半信半疑な状態だろうな。

虫を奥歯で噛み殺した気持ち悪さが、胃酸の酸っぱさに混ざってフクツと喉が膨らんだ。

「……とりあえず、今日の夜連絡するから」

凜はそう言って立ち上がり、そのままドアに向かう。慶一は呼び止めようとしたが、資格とか立場とかいう言葉が頭の中で思いついてしまう。

最低だな、って思っていると、凜が振り向いて、泣き顔のまま愛想笑いする。

慶一はその時、自分がどんな表情をしているのか、分からなかった。

『ダークライト』：6

結局、あれから凜と電話もメールもしないまま、慶一は大学を出てとぼとぼと歩いていった。

周りには同じように猫背で歩いている男や、伏し目がちな背の低い女がてくてくと歩いている。まるでゾンビのようにゆっくり、確実に。自分の足元から緑色の液体が零れているような感覚で、足を使うというより、足を引きずって線を引きながら歩いているような陸からの重力ではなく、空からの圧迫感を感じる。空気が重い。

流れに混ざり合って歩いていた。彼らにも何かしらの悩みがあるんだろうか。

慶一はそんな風に思いながら歩いていると、右ポケット最奥にある携帯が鳴った。

身体がピクツと反応する。急いでサブ画面に書かれてある名前を見るが、そこに書かれてる『柏木慎吾』の文字に落胆して目を落とす。

慶一は電話に出て、

「……はい」

『おー慶一。ちょっと話があるんだけど』

明瞭で活発な慎吾の声が、ゾンビの腐った身体に染み込んでいく。正直、今はあんまり人と話したくないので、返答するのも億劫なんだけど。

「なに、どうしたの」

『いや、今日これから用事でもあるか？』

「別になにもないけど」

慶一がそう言つと、慎吾はそうか！と言つて嬉しそう。機嫌が良みたい、こっちの空気を読んでほしい。

『じゃあちよつと話があるんだけどさ。nana studio』

て覚えてるか？』

「まあ……うん」

遠回しにわかりきったことを聞く。昨日の話だろうが。

『そこに今日の夜八時、ちょっとお前に来てほしいんだ』

「なんでだよ」

慶一が聞くと、声が申し訳なさそうな低さを持っていて、慎吾が電話越しで面倒に頭を掻いたりしてそんな偶像が浮かぶ。

『波崎美雪って覚えてるか』

……だから忘れようがない。心境が心境だけに、慶一はじわじわと苛立つてくる。

「なんだよ」『波崎の彼氏がかなりぶちギレてるらしくて、俺が宥めなきゃいかんくなってる』

「は？　なんで？」

苛立ちがサーツと冷めていく。驚いて、声が大きくなって、慶一は周りにいた人達からうざそうに見られる。

柿崎光がぶちギレたのか？

あの柿崎が？

アンバランスだし、二重人格ほど無理があるんじゃないか。

「本当かよ、それ」

『ああ。なんか昨日に男と歩いているところを見られたらしい。あのあとメールが引つ切りなしに送られたっばくて』

さて、こういうことだろうか。つじつまが合っていないし、意味が分からない。

昨日に男と歩いていた？

それは『銀河』のベースのことだろうか。それなら光は知っているだろう、というか慶一はそのことを光から聞いた。しかもメールせず直接言えればいい……なんて頭の中で推理してるのも怠くて、慶一は眉間に深く皺を寄せる。

「どういうことだ。彼氏って柿崎光じゃないのか？」

『え？　ああ……それは勘違いだ』

慎吾は苦み混じって声を洩らした。

『光と波崎は……まあそこはいいんだよ。問題は本カレの方。ちょっとややこしいんだよ、そこそこ』

無駄に曖昧で、秘密主義的な感じがする。何だかまたもや苛立ってきたらしい、心の奥で目玉焼きが作れそうな“澱み熱”が沸き上がってきた。慶一は足裏に疲れを感じてきた。さつきからずっと大学前アスファルトに立ちっぱなしだ。

「で、俺にどうしろって？」

『お前は来るだけでいい。喧嘩とか起きたときのストッパー的なのをお願い出来るか？』

「お前一人でいいだろ」

『あんまり力強くないんだよ、俺。いや、慶一が喧嘩強そうとか言っていないけどな、あっちは一人だから。二対一の方がなにかと安心だろ？』

上手く利用されてる感じがしないでもないが、慶一の身体に倦怠感と、もうどうでもいいって諦めがある。凜のせいじゃないけど自分のせいだ、って思いたくない弱さがある時に、頼み事なんてされただからだ。

少しだけ黙り込んでしまい、心配したのか、慎吾が訝しく声を落とした。

『どうしたよ？』

「あ、いや……」

慶一は頭の中で波崎美雪の顔を思い出していた。彼女の美化されたイメージが頭の中に浮かぶんで自分に嫌気がさす。

「……なんでもないよ。……わかった、行くよ」

『え、いいのか？』

意外そうに、でもその答えが来ることを予感していたかのように。前者でも後者でも受け取れそうな中途半端に驚いてるような声を出した。

「うん、いいよ。どうせヒマだし。すぐ終わるだろ」

『いや、それはわかんない』

「とりあえず行くよ。何時集合？」

とりあえず早めに七時半とかどうだ？ と慎吾は三十分も早い時刻を定時した。慶一はそれで言い、と適当に返事する。電話を切るときに、はい、はいはいと間延びしたり単調だったりする相手への確認の相槌をお互いにやりあって、いつ電話を切ったら一瞬わかんなくなっていると、慎吾が電話をブツツと切った。こういう時にも優柔不断さが出て嫌になる。

いつの間にか仲間のゾンビはいなくなっている。いや、仲間じゃなくて仲間意識だが。

慶一は濁って凝り固まった雑念を振り払うように、雨の後の犬みたいに頭をぶんぶん振る。身体が少し痛む。目が眩む。

とりあえず帰って支度をしないと。

待ち合わせ場所に早く来てしまうのは気が小さいことだ、と芸能人の誰かがテレビで話していた。

実際、その通り。

慶一は早めの七時十五分ぐらいには、スタジオ前でさっきコンビニで買ったパックの紅茶を飲んで、慎吾をじっと待っていた。一リットルの牛乳パックの開け方はもちろん知っている。慶一は紅茶パックをそんな風に開けて、コップがわりに口の中へとラッパ飲み。微妙に冷たくて、身体が冷えて行くのを感じた。

nana studioの入口は道路に面していて、歩道もなく海上都市みたいな剥きだし感があった。一段だけの段差が海を嫌って拒絶するように、入口と道路の中間で出っ張っている。そこに腰掛けていれば安全だが、段差は思ったより低くて、地面で胡座をかいているのと大差ない。

さあ、どうしようか。

時間が刻々と迫ってくる。それは慎吾が来る、ってことじゃなく

て、凜の兄貴と会うことに対して。凜とは連絡をとってない。あれから三時間、たった三時間。その間に凜とは一度も連絡をとっていない。

もう凜とは別れてしまった、ってことになっているんだろうか。そんな不安と、凜の兄貴と会わないで済むかもっていうどす黒い期待感が胸を押し潰していった。

だから、話がしたかった。メールでもいい。

恐怖があつて、そいつは諦めようとする考えを認めてくれない。脳の中にいるのは、自己保身と凜との“これから”。それらが曖昧に混ざり合う中で、何かしなくちゃって気持ちにさせてくれる何かがあしかった。大学を出る前、慎吾から電話を前。たった三時間の中で。

慶一はうずくまって、自分が履いてるジーンズのがさがさに頬を擦り寄せた。まるでいじめられっ子みたい。体操座りがさらにコンパクトに。

足音が聞こえた。もちろん足音だけじゃない。それだけじゃ顔を上げない。

「おい、慶一」

呼びかけるような声が耳元で響く。慣れ親しんだはずなのに、身体がビクツて引き攣る。考えことをしていたから、思ってたよりも声が近かったから。

ああ、まるで柿崎光だ。

慎吾は慶一の顔を見て、ニカツと笑う。いつもの笑顔だ。安心はしない。

「お前、いつも早いよな、待ち合わせ。何分前から来てたんだ？」

慎吾にそう言われて、慶一はポケットから携帯を取り出して、ディスプレイに表示してあったデジタル時計を見る。七時二十五分。珍しく慎吾は遅刻しなかったようだ。

「十分前ぐらい」

「凄いな、心配性か？」

質問に答えて、軽くからかわれる。慎吾は馬鹿みたいに笑顔で、慶一は疲れきった表情をする。相槌を打つのさえも疲れていた。「うし、そろそろいいか」

慶一は笑顔のまま、通りの奥にある建物の羅列に身体を向ける。そっちにはファミレスに、コンビニに、本屋が並んでいて、比較的人がいそうな場所。

「今からどこに行くんだ？」

「ファミレス。そこにもう波崎はいるから」

慎吾は慶一が立ち上がる確認もせず、それでも慶一に合わせてゆっくり歩いていく。

このまま立ち上がらなかつたら面白いのにな。

でも、慶一はそんなことをせず、慎吾の後についていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2452b/>

Wonderful song

2010年11月28日06時05分発行